

## 師範試験実施要項

### ▽第六十三次漢字部課題

○漢字部 次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体 楷書》

微風閑坐古松（李中）

読||微風閑坐す古松

註||涼しき微風吹く老松の下に心静かに坐す。

・臨書 何紹基 十四字

蘇軾

黒雲翻墨未遮山 白雨跳珠乱入船

読||黒雲墨を翻して未だ山を遮らず 白雨珠を跳らせ乱れて船に入る

・随意《書体 行草書》

庭前幽草忽如積 江上落花渾欲飛（劉崧）

読||庭前の幽草忽ち積むが如く 江上の落花渾て飛ばんと欲す

註||庭の中に草が積み重なるように茂り、江のほとりの花は皆散りかけている。●幽草||深く茂つた草。

### ▽第六十三次かな部課題

○かな部 次の作品三点〔半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体自由》

忘れじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな（儀同三司母）

註||「決して忘れない」と仰るあなたですが、将来のことまでは頼みがたく思われますから、こんなに幸せな今日、今日を最後とする命であつて欲しいと思います。

・臨書 関戸本古今集（伝 藤原行成）

梅の花立依ばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる

・随意《書体 自由》

白露に鏡のとき御空かな（川端茅舎）

註||「露」朝露にびつしより濡れた野原に、秋空は高く澄んで、まるで鏡のように明るい。色彩対称の美しい句。

### ▼第二十一次詩文書部課題

次の作品三点〔何れも半切35cm×135cmに揮毫〕を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

春草の雨に小さき笛ぬらしわが詩吹く子もあれなと思ふ日（金子薫園）

註||春の草に降る雨に、小さい草笛を濡らして、わたしの作った詩を吹いてくれる子もあつてほしいなあとと思う、そんな春雨の一日であるよ。

・臨書（いろは歌）いろは歌を半切に揮毫、得意な古法帖（限定はしない）にて。

全部ひらがなでもよい。

いろ（色）はにほ（匂）へどち（散）りぬるを

わ（我）がよ（世）たれ（誰）ぞつね（常）ならむ

うゐ（有為）のおくやま（奥山）けふ（今日）こ（越）えて

あさ（浅）きゆめ（夢）み（見）じゑひ（酔）もせず

・随意《原文を尊重すること》

蝶ひとつ菊に喰入日和かな（大島蓼太）

註||「菊」秋のよく晴れた日、秋の蝶の一羽が、菊の花にじつととまつて動かない、の意。秋の蝶のあわれさが感じられる。

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも準師範。但し、『日本書道院展（二回以上）出品経験者』で、満二十才以上であること（二〇〇二年四月一日生まれまで認める）。

一、受験料 一万円（漢字・かな・詩文書の別）受験料は作品と別封とし、振替、又は現金書留で同時に本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に二回以上出品の者（部門不問）。第七〇回記念展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、漢字部・かな部・詩文書部合格者には認定証プレートをそれぞれ交付する。但し登録料として五万円納入のこと。認定証プレートの姓号は申請書の姓号によって作成する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月（日本書道誌発表の月）を記入して貼付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、師範試験作品は白画仙紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒（切手貼付、宛名、住所明記のもの）を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

- ◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。
- ◎出品作品には雅印押印のこと。
- ◎受験者の事情により一点又は二点のみを本年受験し、三年以内に三点受験することもできる(受験料はその都度一万円)。

▼第六次硬筆部課題 次の課題を(硬筆用紙)に書いたものを三点提出する

・規定《楷書》

花鳥紅雲春句麗 月梅疎影夜香間 (陳與義)

読||花鳥紅雲春句麗しく 月梅疎影夜香を聞く

註||花と鳥とくれない色の雲を盛り込んだよい春の詩ができ、夜、月に照らされた美しい梅を見ながら芳しい香りを味わう。

●月梅疎影||月に照らされる梅の花。疎影は梅の異名。

・随意《原文を尊重すること 書体自由》

大海の底に沈みて静かにも耳澄ましめる貝のあるべし(明暗)

註||大海の深い底に沈んで、その静かな中で、じつと耳を澄まして、あたりの物音を聞いている貝があることだろう。

・臨書 高野切第三種(伝 紀貫之)

みよしのくやまのかなたにいへもがなよのうきときのかくれがにせむ

― 受験についての注意 ―

- 一、受験資格 準師範
- 一、受験料 六千円 受験料は作品と別封とし、振替、又は現金書留で同時に本院宛に送付のこと。
- 一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。
- 一、申請書は、返信封として84円切手を添えて本部へ請求のこと。
- 一、合格者には認定証プレートと交付する。但し登録料として三万円納入のこと。認定証プレートの姓号は申請書の姓号によって作成する。
- 一、切 十月二十日 発表十二月号
- 一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月(日本書道誌発表の月)を記入して貼付すること。
- 一、不合格者(規定違反も同じ)はその氏名を發表しない。
- 一、師範試験作品は硬筆用紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。
- ◎なお、(1)試験の結果をお知らせするため、返信用封筒(切手貼付、宛名、住所明記のもの)を同封のこと。
- (2)提出した作品は一切返却しない。
- ◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

準師範試験実施要項

▼第七十次漢字部・かな部課題

○漢字部 次の作品二点(何れも半切35cm×135cmに揮毫)を提出する

・規定《書体 行草書》

流光欺人忽蹉跎 (唐)李白

読||流光人を欺いて 忽ち蹉跎たり

註||流れゆく時間は、人を馬鹿にしたように、失意のまゝ老年を迎えさせて、あつという間に過ぎ去る。

・臨書 集王聖教序(王羲之) 十四字

雙林八水味道滄風鹿苑鷲峯瞻奇

読||雙林八水、道を味い風を滄(飡)い、鹿苑鷲峯に奇を瞻、

○かな部 次の作品二点(半切35cm×135cmに揮毫)を提出する

・規定《書体自由》

明けぬれば暮るるものとは知りながら なほうらめしき朝ぼらけかな (藤原道信朝臣)

註||夜が明けると、やがて日が暮れてあなたとお逢いできることはわかっていますのに、でもやはり恨めしく思えてなりませんのは、しばしお別れしないとイケない明け方になるのですから

・臨書 高野切第三種(伝 紀貫之)

やまがはのおとにのみきくもくしきをみをはやながらみるよしもがな

▼第四十次詩文書部課題

次の作品二点(何れも半切35cm×135cmに揮毫)を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

絶頂の城たのもしき若葉かな (与謝蕪村)

註||「若葉」若葉した木々の山の絶頂に城がすつくと建っているが、いかにも何万の大軍でも寄せ付けない程に頼もしく感じられる、の意。

・臨書 (張猛龍碑) 六字

西中郎將使持

読||せいちゆうろうしよう・しじ

― 受験についての注意 ―

- 一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも六段。但し『日本書道院展出品経験者』で、満十八才以上であること(二〇〇四年四月一日生まれまで認める)。

一、受験料 六千円（漢字・かな・詩文書の別）受験料は作品と別封とし、振替、又は現金書留で同時に本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に一回以上出品の者（部門不問）。第七〇回記念展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者（規定違反も同じ）はその氏名を発表しない。

一、受験作品は白画仙紙を用い、準師範受験申請書を作品と共に提出のこと。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

一、準師範受験申請書は、返信料84円切手を添えて本部へ請求のこと。提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印のこと。

◎師範受験時には日本書道院展出品が二回以上必要となる。受験の際は注意すること。

### ▼第十二次硬筆部課題

・規定《書体自由》

次の課題を（硬筆用紙）に書いたものを二点提出する

君かへす朝の舖石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ（北原白秋）

註Ⅱ君を帰そうと見送っていると、朝の敷石の上に雪が落ちてくる。雪よ、林檎の香りのように降っておくれ。

・臨書 蘭亭序（王羲之）十六字

趣舍万殊、静躁不同、当其欣於所遇、暫得

読Ⅱ趣舍万殊にして、静躁同じからずと（雖も）、其の遇う所に欣びて、暫く（己に）得るに当たりては

註Ⅱ行為はさまざまに異なり、動静も同じではないといえ、その境遇を喜び、しばしば自分の意にかなっている時は、

一、受験料 四千元

準師範受験申請書は、返信料八十四円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月（日本書道誌発表の月）を必ず記入して添付すること。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

## 昇段・級試験実施要項

### ▼第二九回漢字部・かな部課題

第一部 「半切35cm×135cm」次の漢字又は、かな（各書体自由）を半切の場合は、縦に揮毫したものの一点

○漢字部

○吾敵正在本能寺 敵在備中汝能備（頼山陽）

読Ⅱ吾が敵は正に本能寺に在り 敵は備中に在り 汝能く備えよ

註Ⅱ我が敵は本能寺に在り、織田信長である、と部下に指図し京へ進撃して目的を達しはしたが、光秀よ、そなたの本当の敵は本能寺にいる信長ではなく、備中に出陣中の豊臣秀吉である。そちらに対する備えこそ万全でなければならなかったのだ。

○かな部

○めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月かな（紫式部）

註Ⅱ久し振りにお逢いできて、あなたかどうか判断できないうちに、雲間に隠れてしまった夜半の月のようにあわただしくお隠れになった幼友達のあなたでした！

一、受験資格 漢字・かなとも二級以上のもの。

一、受験料 一点につき 三千元。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

漢字・かな受験者の事情により昇段試験の課題（漢字・かな）を半切12（35cm×68cm）に二点（書体《書風》を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

第二部 「半紙」次の漢字（楷書）又は、かな（書体自由）を半紙に揮毫したものの一点

○漢字部

○天涼人健（白居易）

読Ⅱてんすずしくひとすこやかかなり

註Ⅱ天候が涼しくなり、誰も彼も健やかになった。

○かな部

○滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ（大納言公任）

註Ⅱこの滝の音は水が枯れて久しく聞こえなくなったが、その名声は世間に聞こえ渡っていて今なお語り継がれている。

一、受験資格

漢字・かなとも二級以下のもの「漢字作品には支部名・段級・氏名（号）を競書と同じく筆によって揮毫する。かなの場合は名（号）又は雅印を捺したうえに、左下隅に鉛筆で段級と支部名、姓号を記入する。」

- 一、受験料 一点につき 千円。
- 一、成績により一級以下の相当級に編入する。

#### ▼第四十回詩文書部課題

○第一部 「半切」次の俳句〔原文を尊重すること〕半切35cm×135cmに揮毫したものの一点  
 ※形式は半切の場合は縦作品に限る

○山茶花さざんかにあるは雲みぞのふる日ひかな（河東碧梧桐）

註Ⅱ 「山茶花」雲の降る庭に、山茶花の花だけが咲いている、というのである。初冬の静かさがとらえられた句。

- 一、受験資格 二級以上のもの。
- 一、受験料 一点につき 三千円。
- 一、成績により六段以下の相当級に編入する。

詩文書受験者の事情により昇段試験の課題を半切1/2（35cm×68cm）に二点（書体《書風》を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

○第二部 「半紙」次の俳句（原文を尊重すること）を半紙に揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る

○暁あけつきや鯨くじらの吼ほるしもの海うみ（加藤暁台）

註Ⅱ 「しもの海」暁方の霜風しもかぜの海に鯨が泳いでいる。時折吼えるかのように潮を高く吹きあげている、の意。

- 一、受験資格 二級以下のもの。
- 一、受験料 一点につき 千円。
- 一、成績により一級以下の相当級に編入する。

#### 新 書例集刊行

日本書道院役員、審査会員の作品

日本書道院展公募一科、並びに同人。

毎日書道展公募サイズ、二尺×六尺、二・四尺×五尺のサイズ

漢字・かな・詩文書二〇八点掲載

一、A4判 上製本

一、会員配布 五〇〇〇円 送料込

#### ▼第十四回硬筆部・昇段・級試験課題

○応用部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点

・花が開き始めて散るまでの短い時間儂しなき桜さくらの姿を愉たのしみ愛あいでる。

- 一、受験資格 一級以上のもの。
- 一、受験料 一点につき 二千円。
- 一、成績により六段以下の相当級に編入する。

○基礎部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点。

・猫ねこというのは神様が作った一番綺麗な生き物です。そう思いませんか。

- 一、受験資格 二級以下のもの 作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく硬筆用紙に書く。
- 一、受験料 一点につき 千円。
- 一、成績により一級以下の相当級に編入する。

― 出品についての注意 ―

一、×切 十月二十日 発表十二月号

一、作品には十月号発表の競書成績の段級と支部名又は府県名、氏名又は号を書いた小票（たて11センチ×よこ4センチ・競書用出品券使用可）を作品の左下に貼付する。又作品左下隅にも同じく鉛筆で段級・支部名・氏名を記入する。硬筆部は『硬筆用紙』に記入する「級の無いものは新とすること」。

一、漢字部・かな部・詩文書部の一級以上の者は第一部「半切」へ、『硬筆部は応用部・硬筆用紙で』出品のこと。

一、各部で昇級できなかった者は氏名を発表しない（規定違反も同じ）。

一、昇級試験の作品は競書作品と別にし、必ず封書に「昇試」と朱書のこと。

一、受験料は振替又は現金書留で作品と同時に送付のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎「半切・半紙」出品作品には雅印押印の習慣をつけること。